

瀬戸SOLAN小学校第1学年・学年通信



明日のハロウィンに向けて



ハロウィンイベントに向けて各クラスで装飾がほどこされ、「いよいよ明日だね」という雰囲気盛り上がってきました。

特に、ネプチューンクラスの前（写真左上）には、オリバー先生手作りの装飾品が置かれ、子どもたちの歓声が起きていました。

どんな風に作ったのかをオリバー先生が紹介してくれたので、以下に紹介します。

Making Halloween Gravestones

First I found cardboard boxes around the right size and cut the top of the box into a gravestone shape.

Next, I used paper mache to fill the gaps and smooth the surface.

I used the laser cutter to neatly cut out some decorations from cardboard and glued them to the gravestones.

Last, I painted everything grey then used a sponge to add texture and highlights.

ハロウィンの墓石作り

まず適当な大きさの段ボール箱を見つけ、箱の上部を墓石の形にカットしました。

次に張り子を使って隙間を埋め、表面を滑らかにしました。

レーザー カッターを使用して、ボール紙からいくつかの装飾をきれいに切り取り、墓石に接着しました。

最後に、すべてをグレーにペイントし、スポンジを使用してテクスチャとハイライトを追加しました。

オリバー先生は本当に手先が器用で、コルドンブルーに置かれているレーザーカッターを巧みに使いこなして次々と色んな作品を生み出しています。

明日の様子は、メディアクリエイターの増田さんがまたダイジェストにまとめて下さるはずなので、後日コスモスハーモニーでも紹介する予定です。

ダイジェスト動画と言えば、先日の南公園に行った時の映像をまだ紹介していませんでした。

以下のリンクからどうぞご覧ください。

https://youtu.be/lkt_Pctq8Co

ちなみに、ハロウィンイベントをこれだけ全校規模で大々的に行う学校は全国的に見ても相当少ないはずです。

せっかくなので、その歴史や由来について、コスモスハーモニーでも簡単に紹介してみます。

ハロウィンの発祥は、2000 年以上も前。ヨーロッパの古代ケルト人が行っていた祭礼「サウィン（Samhain）」というお祭りが起源だといわれています。

サウィンは「夏の終わり」を意味し、秋の収穫を祝うとともに、悪霊を追い払う宗教的な行事として、古代ケルト人の暮らしに根づいていました。

ケルトの暦では、10月31日は1年の終わりの日であり、現世と来世を分ける境界が弱まる時。

そして、死者の魂が家族の元へ戻ってくる日としても信じられていました。日本で言うところの「お盆」と性格が似ていますね。

なお、この祭りでは死者の魂とともに悪霊も一緒にやってくると考えられており、その悪霊に人間だと気づかれないように火を焚いたり仮面を着けたりして身を守ったといわれています。

この風習が、ハロウィンの代表的な習慣である仮装の起源となりました。

この土着信仰が、やがてキリスト教と結びつき、キリスト教の諸聖人に祈りを捧げる「万聖節」（または「諸聖人の日」）の前夜祭として行われるようになりました。

尚、Hallow とは「聖人」を意味する言葉で、「諸聖人の日＝All Saints' Day」は「All Hallows」とも表記されます。

11月1日の「All Hallows」の前夜である10月31日は、「All Hallow's Eve (Eve)」。これが短くなり、訛って「Halloween」といわれるようになったといわれています。

正確な期間としては10月31日～11月2日とされ、この期間中、キリスト教では現世に戻ってくる死者の魂を慰める行事を行います。

ちなみにハロウィンといえば「Trick or Treat」という言葉も有名です。この由来は諸説ありますが、そのうちの一つに、死者へ供える「ソウルケーキ」をもらう「ソウリング」という中世ヨーロッパの儀式があります。

「Trick」は「たくらみ」や「悪ふざけ」などを意味します。

日本では、「いたずらしちゃうぞ」というニュアンスの訳がポピュラーですね。

そして「Treat」は「待遇する」「大切に扱う」「もてなす」などの意味をします。

子どもたちは、要は、家族のもとへ戻る死者の魂に紛れてやってきた悪霊に扮するわけです。

「Trick or Treat」とは、「悪霊にいたずらされたくなければ、お菓子をちょうだい」という意味だということです。

このセリフと共に有名なのが、「ジャック・オー・ランタン」。

ハロウィンが近づくと、街では不気味な表情が彫られているカボチャのランタンをよく見かけます。

このランタンには、ケルト人の文化が根強く残るアイルランドのある物語に由来しています。

その物語のあらすじを紹介します。

悪事ばかり働いていたジャックという男が、生前自分の魂を狙った悪魔と「死んでも、地獄に落とさない」という契約を結ぶ。ジャックは死後、生前の行いから天国へ行くことはできず、悪魔との契約のせいで地獄に行くこと

もできない。行き場を失ったジャックはくり抜いたカブの中に火を灯し、今も彷徨い続けているという。

物語に登場したのは、カボチャではなくカブでした。

なぜ今日カボチャが定着しているのかというと、ハロウィンがアイルランド移民によってアメリカに伝わったとき、アメリカではカブよりカボチャの方が入手しやすかったことが一説にあります。

また、カボチャはカブよりもくり抜きやすく、ろうそくを中に入れやすかったという理由もあるようです。

このように、古代ヨーロッパに起源を持つハロウィンは、今や世界の様々な国で楽しまれる一つの文化となりつつあります。

また、発祥の地であるアイルランドとハロウィンと、大規模イベントが開催されることで有名なアメリカのハロウィンには大きな違いがあるように、すでに国々によって独自の発展を遂げている例も少なくありません。

例えば、メキシコには「死者の日」というものがあります。

世界のハロウィンを語る際には、同じ時期にあるメキシコの風習「死者の日（Dia de Muertos）」に触れないわけにはいきません。

死者の日には故人の魂がこの世に帰るといわれており、10月31日の前夜祭から、子どもの魂が帰る11月1日、大人の魂が帰る11月2日と、3日間にわたり祭りが開かれる。

どう見ても、ハロウィンとの関連が強く感じられる風習ですね。

この「死者の日」の起源は、2500年以上も前にさかのぼります。

その頃から、祖先のガイコツを身近に飾る風習があったそうで、スペインからの侵略を受けた際に、アステカ文明の儀式がキリスト教の万聖節と融合して現在の形となったと伝えられています。

死者の日が近づくと、メキシコでは至る所にカラフルなガイコツグッズが溢れかえります。

家庭や街には、赤いケイトウやオレンジ色のマリーゴールドの花と、オレンジやレモンなどのフルーツで彩られた「オフレンダ」といわれる祭壇が用意され、死者の魂を迎える準備が始まるわけです。

メキシコの人々にとって死者の日は、死者とともに明るく楽しいひと時を過ごし、祭りを終えた後には死者が満足して死者の国へと帰れるように祈る日なのです。

当日、故人の親族はお墓の前で食事を楽しみ、楽器を演奏したり踊ったりと、それぞれ死者との交流を楽しみます。

と、ここまでを読んで、あの映画を思い浮かべた方がおられるかもしれません。そうです、ピクサー映画「リメンバー・ミー」は、この「死者の日」をモチーフとして作った映画です。

ハロウィンの直前に見る映画としてはぴったりの作品ともいえるでしょう。

ここまで少し詳しくハロウィンのことを紹介してきましたが、単純に仮装をしてひと騒ぎするだけのイベントではなく、事前に関連する映画を見たり、その由来についてほんの少しでいいので家族で語らえたりすると、ハロウィンの楽しみ方にも一段と深みができるかもしれません。（渡辺道治）



（紙面へのご意見ご感想などもいつでもお寄せください。）



[1 学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ \(google.com\)](http://google.com)